

写真で
振り返る

暮らしのあんやたん⑩

沖縄ホテル 前編

※沖縄ホテルは拡大版として前後編の2回連載でお送りします。読者プレゼントあります！

◆沖縄で第1号の観光ホテル

沖縄ホテル（宮里一郎社長）は、戦前の1941（昭和16）年に沖縄の観光ホテル第1号として那覇市波之上に、現在の社長の父である故・宮里定三氏（1912（明治45年）～99（平成11）年）が創業した。

当時、来沖する観光客（主に商船や各業界のVIP）の受入施設が少なく、県知事が日本国へ要請したのが始まりだ。その頃は、ホテル建設に国の許可が必要な時代で、日本国のホテルは、東京、名古屋、九州、台湾にそれぞれ1軒ずつあるくらいだったという。

創業時の沖縄は物資不足で、県知事を通して台湾からひのきやシルク布団を取り寄せたり、沖縄で初めての冷蔵庫や水洗便所、発電機をアメリカから輸入した。

宮里定三氏は、名護市羽地出身であったため、ホテル従業員も同郷から採用。同年に太平洋戦争が始まり、軍の高官が宿泊するようになり、開戦時の首相でもあった東条英機も宿泊した。44（昭和19）年、戦争が激しくなってくると、定三氏ら家族や従業員は疎開したが、ホテルは日本軍専用の宿泊設備として使用され、翌年の45（昭和20）年5月中旬頃に米軍の艦砲射撃により消滅した。



沖縄の観光ホテル第一号として那覇市波之上に一九四一（昭和十六）年に建てられた沖縄ホテル。金城カンパニーに依頼し建設したホテルは、地上三階、地下一階建てで、台湾ひのきを使用。できた当初、沖縄で初めての水洗トイレや冷蔵庫等を女学生らが見学に訪れていたそうだ。四五（昭和二十）年に米軍の艦砲射撃によって惜しくも消滅した。



戦後1951（昭和26）年、那覇市大道（現在地）に2階建てのレンガ造りの建物を購入し、改造後7室のホテルを再開した。日本航空の指定宿として歴代の所長が長期宿泊したり、アメリカ軍基地の建設ラッシュで三井物産などの商社や時事通信の社員らも宿泊した。中には2年近く滞在する人もあり、常に満室だった。



戦後のホテルの玄関前に立つ宮里定三氏。

◆軍のVIP接待

戦前、沖縄ホテルは船も所有していた。軍のVIPを接待する際は、その船にコックを乗せ、釣りに出掛けた。釣った魚を船上でコックが天ぷらにするなどしてもてなした。現在、波之上自動車学校がある当たりは当時海で、ホテルから程近いところに船を停泊させていた。

◆沖縄ホテル誕生秘話

宮里定三氏の伯父さんは、明治時代の終わりか大正時代初め頃から神戸で移民者専門の「ゑびす屋旅館」を営んでいた。外国へ移民する沖縄出身の人を対象にした旅館で、移民者は乗船手続きのために約1週間から1カ月程の神戸滞在を余儀なくされていた。当時の「ゑびす屋旅館」は、宿泊のみならずビザやパスポートの取得等乗船手続き一切の渡航手続きを担う現在の旅行業者の役割も果たしていた。沖縄方言しか話せない人や字を書けない人、印鑑を所持していない人なども多く、通関手続きのための人知れぬ工夫や苦労を重ねていたらしい。「ゑびす屋旅館」時代の経験は、親交のあった後の沖縄の旅行業創始者たちに大変重宝がられ、参考にされたという。

さて、なぜ伯父さんが神戸で「ゑびす屋旅館」を営むようになったかという、ある女性との恋物語ゆえだった。名護市羽地出身の伯父さんは、かつて大志を抱きハワイへ移民していた経歴の持ち主。そこで、神戸の「ゑびす屋旅館」の娘と出会ったのが後の人生を大きく変える。当時、「ゑびす屋旅館」は旅館業を営みながらキリスト教の教会をしており、娘は宣教師としてハワイに赴任していた。2人はハワイで恋に落ち、結婚後、伯父さんは「ゑびす屋旅館」の婿として神戸で暮らすようになったというわけだ。

1931（昭和6）年宮里定三氏は伯父さんを頼り神戸へ行き旅行業者免許を取り「ゑびす屋旅館」で働き始めた。40（昭和15）年頃、沖縄でVIPが宿泊できるホテルを作りたいとの要請が伯父さんにあり、定三氏に「やってみなさい」と任せ沖縄ホテルが誕生した。

★★★読者プレゼント★★★

沖縄ホテル（那覇市大道）内パームガーデンレストランのパーベキューお食事券を読者の中から抽選でペア3組様にプレゼント。ご希望の方は、住所、氏名、年齢、電話番号、「ウチナー昔たび」の感想をお書きの上、郵便はがきで〒900-8678那覇市おもろまち1丁目3番31号 沖縄タイムス社販売局企画管理部「ウチナー昔たび沖縄ホテルプレゼント係」、もしくはeメールhanbai@okinawatimes.co.jpにて同内容を記載の上、6月30日必着でお送り下さい。当選発表は沖縄タイムス販売店からの発送を持ってかえさせていただきます。

発行：沖縄タイムス販売店
電話：098-860-3565（事務局）